

## 札幌市環境プラザ運営協議会 令和7年度第1回 実施概要

1. 日 時 令和7年10月15日（水）18:30～20:00

2. 会 場 札幌市環境プラザ 展示コーナー

3. 出席者

- (1) 委 員：安東 義乃 委員（合同会社エゾリンク） \*オンライン参加  
宇山 生朗 委員（環境省北海道環境パートナーシップオフィス）  
岡崎 朱実 委員（環境活動コンソーシアムえこらぼ）  
橋本 結 委員（北大森林研究会） \*公募委員  
村井 悠介 委員（札幌市教育委員会教育課程担当課）  
飯岡 慶崇 委員（札幌市環境局環境都市推進部環境政策課）  
高坂 美江 委員（札幌エルプラザ公共4施設 館長）
- (2) 札幌市：環境政策課環境教育・啓発担当係長、環境政策課推進係 係員
- (3) 事務局：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会（指定管理者）  
佐藤 貴明（市民活動担当課長）  
上杉 直洋（札幌市環境プラザ）  
野津 あゆか（札幌市環境プラザ）

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) あいさつ 札幌市環境局 環境都市推進部 環境政策課長 飯岡 慶崇 様
- (3) 運営協議会について
- (4) 委員 自己紹介
- (5) 議事
- ・運営および施設利用状況について（令和6年度報告）
  - ・令和7年度事業計画および中間報告について
  - ・意見交換「アウトリーチ事業について」
- (6) あいさつ 札幌エルプラザ公共4施設館長 高坂 美江
- (7) 閉会

5. 議事概要

・令和6年度事業報告および令和7年度の計画・中間報告

事務局から令和6年度の事業報告および令和7年度事業計画の説明、中間報告を行った。

### 質疑応答

（委 員） 事業報告書について、報告書に記載されている実施事業が「ほか2件」とまとめられているため、どの事業枠で何の事業を実施しているのかが分かりづらい。そういった記載は割愛しない方が、実施件数なども分かりやすいと感じた。

また、各事業の終了時に事業報告書を作っていると思うが、ホームページで掲載するなど工夫してもらいたい。

(事務局) 事業報告書は昨年度と同様の様式を使用しており、情報量が多いためまとめて作成している。しかしながら、委員の言うとおり、説明資料として分かりづらい点があるため、次回に向けて、より分かりやすい資料づくりを工夫したい。

また、事業報告の掲載について、ホームページ上で過去の実施事業が見えることで、過去の変遷やこの施設でどんな取り組みをしてきたのかが分かると思うため、ホームページの構成も含めて更新を検討したい。

(委 員) 多様かつ充実した環境教育活動を進められていることに敬服する。ここで気づきを得た方々が日常の様々な選択場面において環境配慮に関する意思表示をすること、行動変容をすることにつながっていることと思う。この施設のような基盤的な環境教育活動こそ改めて重要だと深く感じた。

そのうえで、昨年度も意見として出ましたが、統合ビジョンや重点とする領域、方針の不在が構造的な課題になっているのではないかという印象を持った。

例えば、展示、講座、相談、アウトリーチなど、個別事業にはそれぞれの目的があると思うが、施設全体としてのビジョンが見えづらいため、点在する単発企画の集合体に見えててしまう側面があるのではないかと感じる。取組みを進めていく中で、実際にはビジョンがあると感じているため、それを全体としての年度ビジョンや重点方針として記載すべきではないかと思う。

そういったものがあることで、それにたどり着いているかどうかという指標の検討もできるのではないか。

(事務局) 事業が点在化して見えるという意見に対して、環境プラザとしては一つの柱を立てて取組んでいくというより、多様な取組みを多くの方に経験してもらうことで、機会提供を創出していきたいと考えている。

しかしながら、一つひとつの取組みをどのように関連させていくかも重要なため、事務局としても、環境プラザが目指す方向性やビジョンについて、見せ方を考えていきたいと思う。

(委 員) 札幌市の政策では、2050年ゼロカーボン、次世代人材の育成、地域循環共生圏や自然共生にも触れているが、そういった政策と環境プラザでの実施事業との連動性が文章上で見えないのがやや気になる。

指定管理者の理念として「一人でも多くの方々に気づきの場を」という文言はあるし、それ自体は大事だと思うが、指定管理者である以上、政策的な支援機関もあるため、政策と実施事業の接続性を腑に落としていくのは、かなり重要なと感じる。

札幌市の環境政策全体の中で、環境プラザが担う機能、役割とは何かということがまず前提にあると、取組みの内容も深められるという印象を持った。

(事務局) 政策との連動性については、事務局としても一層の検討が必要だと感じてい

る。直近では、ゼロカーボンを事業の取組みとして活用していかないか情報収集をしているが、調整事項が多くまだ課題が多いと感じている。

今日、明日の話ではないが、政策と連動性を持った事業についても、実施報告ができるよう準備を進めていきたい。

(委 員) 事業の分類として「学ぶ」「つなぐ」「支える」があるが、運営指標としては曖昧な印象があると感じる。本来、年度の重点目標として、対象者がつながる機会を増やす必要があるから「つなぐ」を重点化したい…という話であれば、そこに特化した事業を増やし、指標として連動する要素があると思うが、そのように使用している印象は感じられない。

しかしながら、恐らく年度の重点を明示する枠組みのはずだと思うため、3分類の優先順位や、この分類の狙いがあれば説明してもらいたい。

(事務局) 「学ぶ」「支える」「つなぐ」についても、どれかに優先順位をつけるわけではなく、それぞれのきっかけ作りだと考えている。

「学ぶ」は、子どもたちや多世代に向けて次のアクションに繋がるきっかけ作りとして、施設が主体となって機会提供を行う。

「支える」は、主体が環境プラザから外部団体に移り、こどもエコクラブに登録して活動している団体や環境学習を進める小学校、中学校に教材の貸し出しを行う、団体が主催するイベントに協力することで、活動を支援する。

「つなぐ」は、講師派遣制度など、環境活動を主催している団体に向けて専門家を派遣することで機会提供をしている。

それぞれが大事な役割を持っているため、現時点ではいずれかに特化する考えはないが、3分類が持つコンセプトを打ち出すという意見は参考にさせていただきたい。

(委 員) ここまで話していただいた「分散させて多様な機会提供を行う」が環境プラザのビジョンであり、戦略だと思うので、言語化されていることが重要だと感じる。日常で環境問題に触れる機会のない子どもたちや大人たちに向けて多様な機会を提供し、あらゆるステークホルダーが環境に触れられるタッチポイントを創造し続けるのがこの支援機関だということを打ち出すだけで分散する価値が理解できるため必要だと思う。

また、環境政策との連動についても、言語化されることで非常に分かりやすくなると思うため、改めてにはなるがビジョンの言語化を考えていただきたい。

(委 員) 「学ぶ」「つなぐ」「支える」の3分類の見える化は、前回の運営協議会で意見として出ていたため、入れていただいたのだと思う。

3分類のうち複数に当てはまる事業については、重点的な分類を二重丸にするなど、深く考えてもいいのではないかと感じた。

また、事業報告書について、実施回数の記載があるが、例えば「あそビバ！エコプラザ」であれば、出展団体の件数を記載する、新規出展団体を明記する、

また、それぞれの事業に取組むにあたっての職員の気づきなども記載していただけると、成果も見え、施設により親近感が湧いて、応援していきたい場所になっていくのではないかと思う。

実際に取組んでおられることが報告書にうまく反映されておらず、もったいないと感じる。

(事務局) 委員の皆さんからご意見をいただいたとおり、施設の取組みの見せ方、伝え方に関しては、この場で留まらせず、工夫した情報発信が必要だと考えているため、今後の報告に活かせるよう検討したい。

(委 員) 他の委員からも意見があったが、毎年やっている恒例の行事なのか、今年度から新しく始めた行事なのかが分かるとよい。

また、昨年度の運営協議会で、参加者の感想を聞いてフィードバックし、それを事業計画書や報告書にも書くといいのではないか、という話があったと思うが、今回もそれがなかった。もし、意見を聴いているようであれば、参加者がどういう感想を持っていたのか、その事業に関わった人たちがどう感じたのかが分かるため、よりよい報告になると感じる。

(事務局) 新規事業なのか継続事業のかが分かるように、次回は作成したい。

また、各事業に対してどういった感想が寄せられたかについては、昨年度もご意見をいただいていた中で、反映できていなかったため大変申し訳なく感じている。運営協議会の中で事務局から直接伝えられるよう用意しているが、より詳しいアンケートなどは、次回以降、一つ一つの事業に結果をつけたい。

(委 員) 学校教育の現場でも環境は大事だという話はしており、その場では「環境は大事だ」と振り返りに書いていた子どもが、次の日に遠足へ行ったらお菓子の袋をぽんと外に置いていたりする。そういう場面を見る度、体験が不足しているのではないかと感じており、札幌市でも体験の機会を大事にしています。

環境プラザでは体験活動を複数回実施しており、自然が大切であるということを直接体験する機会をつくるていただいているので、今後さらに大事にしていただきたい。

(委 員) 先ほど話にあった講師派遣や教材貸し出しについては、知らない方が多いのが実態だと感じる。そのため、教育現場に環境プラザが持つ場所、教材、知識について教えていただけたら、より子どもたちの充実した学びに繋がり、環境への关心が深まっていくのではないかと思う。

(事務局) 先日、事務局が講師派遣制度の下見に行った際、学校の先生から教員一人ではここまで体験活動ができないので、専門家の方に来ていただき、より深い学びに繋げることができた、と感謝の声をいただいた。より多くの方に情報提供を行う必要性も感じていたため、ぜひ各委員にもご協力いただきたい。

(委 員) 令和6年度の実施結果は計画書を立てたとおりに実行できたか、またそれを踏まえて、どのような想いで令和7年度の事業計画書を作成されたのかを教えていただきたい。

(事務局) 令和6年度の事業計画については概ね達成できたと考えている。

しかし、環境プラザは札幌市の環境教育施設という立ち位置で、様々な環境団体が出入りする場所であることも目指しているが、各団体との繋がりはまだ弱いと考えているため、団体との繋がりを強めていくことを目的として、共催や協力事業に取組んでいくことが重要だと考えている。このように各団体との繋がりを強めていくことで、さまざまな世代の方に向けて普及啓発の体験機会を増やしていきたいと考えている。

(委 員) 令和6年度全体をとおして、挙がった課題について共有していただきたい。

(事務局) 普及啓発事業の中で挙がった課題は、環境プラザの事業に魅力を感じもらえる広報を行うこと、また、参加者が事業をとおして感じた環境問題への学びや気づきが日常生活にも繋がっていき、そこからさらに環境保全への普及啓発が広がっていく…というような連続性を持った事業にしていける工夫について、話が出ていた。

(委 員) そういう課題感もつけていただけだと、次年度の事業計画についても、視点が変わり、議論も進むのではないかと思う。

#### ・意見交換「アウトリーチ事業について」

多くの方に“環境問題への気づきの場”を提供することを目的として実施しているアウトリーチ事業について、より効果的な事業とするため各委員と意見交換を行った。

(委 員) 環境教育ではない場所や環境系のイベントではない場所に出ていくことが非常に重要だと感じる。例えば、札幌市とよく連携している北海道コンサドーレ札幌は、社会連携の一環でドームの中で多数の社会連携事業をされているが、スポーツと健康というテーマで親子行事をやっているので、そういった場面でスポーツと環境の接続性はあるのか…という話を取り入れてみるのはどうだろうか。

あるいは、IT教育の関係でさまざまな親子教育をされている印象もあるため、情報と環境の連動性をテーマにする、もしくはそういった組織との分野連動や組織間連携といった構造が作れると、多様な側面からのアウトリーチになり意義が高まると思う。

(事務局) アウトリーチを実施する際に、環境教育の場を連想していたが、そういった分野に関心のない人たちが集まっているところに赴き、違う視点で取組みをしていくのが大事だと感じた。

(委 員) 環境問題は社会経済のひずみから生まれるものであるため、社会経済の主体

と連携し、環境の取組みを行うことで、その運営者に環境的な観点をインプットしていくことこそがアウトリーチの多面化という価値が生まれるのではないかと感じる。パートナーシップの一環でそういった取組みを進めているため、環境プラザとも連携したいと感じた。

(事務局) 大変参考になった。

(委員) ライジング・サンという音楽のフェスティバルで取組んだ事例を紹介すると、私たちがシラカンバを倒木して製材し、芯を入れるという準備をした鉛筆を持っていき、その鉛筆を参加者の方にカンナで削ってもらい自分好みの形にしてもらうというワークショップを実施した。また、その場で、木を切るとどういう材が生まれてくるのか、また、その仕事にどういう人が関わっているのかといった話をした。

先ほどの委員の話ではないが、環境分野を主たる目的で来ていない方たちに向けて「たまたまそこにあったから」という理由で楽しんで鉛筆を削って、持って帰ってもらうことを目的として実施した。そういった取組みをフェスティバルやお祭りなどでやっても良いのではないか。

(事務局) ライジング・サンのような大きな出展イベントを足がかりにできたら面白いと感じた。参考にさせていただきたい。

(委員) アウトリーチという言葉を調べたところ「支援が必要な人たちにこちらから積極的に働きかける活動」と書いてあった。これは、環境プラザに足を運ばない人たちに対してということだと思うが、環境プラザのスタッフは人数が限られていることを考えると、既に実施しているアウトリーチに加えて、少しハンドルの高そうなものが加わっていくというのは、職員のワーク・ライフ・バランスを考えたら、どうなのだろうかという気がしている。

外に出ていくだけではなく、公共4施設に他の目的で利用しに来ている方に向けて、何か気づきを得られる、考えてもらえるような工夫のある掲示をする、指定管理されている別の施設に働きかけて発信するなど、今あるリソースを上手く使っていくことも考えられたほうがいいのではないか。

(事務局) 視点を変えた取組みも、身近なところからやっていくということも、どちらも大事だと考えている。しかし、人材の部分に関しては限られた資源の中でやっていく必要があるため、効率は考えていかなければいけないが、児童会館へのアウトリーチは検討しています。

私たちからもお伺いしたいのですが、学校の教室でアウトリーチのような体験事業を周知することは可能なのでしょうか。

(委員) 可能だと思う。学校には教育課程の編成があり、学校としてどういう学びをしていくかがあるので、その中に当てはめができると思う。また、計画的に早い段階でお知らせすれば問題ないと感じる。

しかしながら、学校が何を狙って授業をしているかによって、全く関係がな

いことであれば離れてしまうため、そのすり合わせは必要になってくる。

(事務局) 次年度に向けてこういうことをやっていきたいなど、アプローチを早いタイミングでしていくことが重要か。

(委員) 年度の途中でも学びの中で活用できる内容だと学校側に感じてもらえば、すぐに取り入れてもらえることもあると思う。教員自身が来年度やりたいと感じていても、そこに当たはまる学年の教員になるとは限らないのも難しいところだが、4月以降のタイミングで興味がある先生が実はこれをやりたいということもあるので、年度途中の周知でも成り立つ場合はあると感じる。

(委員) 関連して、札幌市小中学校環境教育研究会というものが立ち上がって株式会社アドバコムと札幌市環境局で連携協定を結んでいるため、そういった方々と連携していくことも必要ではないかと感じる。

熱量がある方々とモデルを作り、それに基づいて多様な学校に展開していく余地があると思うし、その際にインフラやリソースを重視するというのもあると思う。ここで何ができるかを探究学習の一つのテーマにしながら、かつ、学生にもプレーヤーになっていただき、例えば、高校生、中学生であれば小学生に教えるプログラムを設計するなど、担い手育成も運動させていくと人手という観点もクリアになる要素はあると思うので、そういった展開もあり得るのではないか。

(委員) 私も児童会館の職員が児童会館ができるようなものを提供したり、また、児童会館の職員研修をとおして短い時間でも何かができたと職員から児童に教えてもらえるようなツールをつくってみたりするなどで、（環境プラザの職員以外に）さまざまなリソースが広がっていくといいのではないかと感じた。

(委員) 学校への講師派遣や学校からの見学は札幌市のどの辺が多いのか。

(事務局) 施設見学で来る小・中学校については、特定の地域から来るわけではない。バスと地下鉄を乗り継いで来る学校もあるため、環境プラザのアクセスの利便性が行きやすい施設になっているのではないか。

しかし、マップにしてみたら実はここに固まっていたというのが見えてくるかもしれないで、検証する価値はあると感じた。

(委員) アウトリーチについて、行く回数を減らし、かつ目に触れるなどを増やすことであれば、学校が行きやすい遠足の地である動物園などにパネルを置かせてもらうなどの連携もいいのではないか。

また、自身の経験談として、環境教育のみでPRをしようとする学びの要素を強く感じて拒否反応を示す方も多いため「楽しさ」と関連できることは重要だと思う。先ほど別の委員からも意見が出ていたが「知らないうちに、楽しんでいるうちに持ち帰っている」みたいな仕掛けが大事だと感じる。

例えば、旅行と組み合わせて、旅行の行き先として寄ってもらうなどもいいのではないか。

(事務局) 今年度、円山動物園とはさまざまな連携をしています。例えば、委員のご意見とは逆のパターンですが、円山動物園には動物を見に来た親子しか来ないから、複合施設であるエルプラザの中にある環境プラザの展示スペースに物を置くことで、いろいろな人が行き交う中で見てくれるのではないかということで、今年11月から海鳥の展示を行う。昨年度までは動物園だけで展示していたが、今年度はより多くの人に見てもらうために環境プラザでも実施しよう…となつた次第である。

そういうたった考えで、環境プラザの取組みを動物園側に持っていくことも考えていきたい。

以上